

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごしやくあぶつくようじ

四糸金吾釈迦仏供養事

新版
1555
〜
1560

しじようきんごしやかぶつくようじ

四条金吾釈迦仏供養事

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

しじようきんご

建治 2 年 ('76) 7 月 15 日

55 歳

四条金吾

ごにつき

なか

しやかぶつ

もくぞういったいとううんぬん

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云々。

かいげん

ふげんきよう

い

だいじようきようてん

しよぶつ

開眼のこと。普賢経に云わく「この大乘經典は、諸仏の

ほうぞう

じつぼうさんぜ

しよぶつ

げんもく

とううんぬん

い

宝蔵なり。十方三世の諸仏の眼目なり」等云々。また云わ

ほうどうきよう

しよぶつ

まなこ

しよぶつ

よ

く「この方等経は、これ諸仏の眼なり。諸仏はこれに因つ

ごげん

ぐ

え

うんぬん

きよう

なか

て五眼を具することを得たまえり」云々。この経の中に

ごげん

ぐ

え

いち

にくげん

に

「五眼を具することを得たまえり」とは、一には肉眼、二に

てんげん

さん

えげん

し

ほうげん

ご

ぶつげん

ごげん

は天眼、三には慧眼、四には法眼、五には仏眼なり。この五眼

をば、法華經を持つ者は自然に相具し候。譬えば、王位に

即 ひと じねん くに 徒 たいかい しゅ もの

つく人は自然に国のしたかうがごとし。大海の主となる者

じねん うお う に けごん あごん ほうどう はんや だいにちきよう

の自然に魚を得るに似たり。華嚴・阿含・方等・般若・大日經

とう ごげん な ぎ いま

等には、五眼の名はありといえども、その義なし。今の

ほけきよう な ぎ そな そうろう な

法華經には、名もあり、義も備わつて候。たとい名はな

かなら ぎ

けれども、必ずその義あり。

さんじん ふげんぎよう い ほとけ さんしゅ み ほうどう

三身のこと。普賢經に云わく「仏の三種の身は、方等よ

しよう だいほういん ねはんかい いん

り生ず。これ大法印なり。涅槃海を印す。かくのごとき

かいちゆう よ さんしゅ ほとけ しようじよう み しよう さんしゅ

海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず。この三種の

身は、人天の福田、応供の中の最なり」云々。三身とは、一

ほっしんによらい

に

ほうしんによらい

さん

おうじんによらい

には法身如来、二には報身如来、三には応身如来なり。こ

さんじんによらい

いつさい

しよぶつかなら

相 具

たと

つき たい

の三身如来をば一切の諸仏必ずあいぐす。譬えば、月の体

ほっしん

つき

ひかり

ほうしん

つき

かげ

おうじん

譬

ひと

つき

は法身、月の光は報身、月の影は応身にたとう。一つの月

みつ

理

いちぶつ

さんじん

とく

に三つのことわりあり。一仏に三身の徳まします。

ごげん

さんじん

ほうもん

ほけきよう

ほか

まった

そうら

この五眼・三身の法門は、法華経より外には全く候わ

ゆえ

てんだいだしい

ほとけ

さんぜ

ひと

さんじん

ず。故に、天台大師云わく「仏、三世において等しく三身

あ

しよきよう

なか

ひ

つた

うんぬん

有り。諸教の中においてこれを秘して伝えず」云々。この

しやく

なか

しよきよう

なか

そうろう

けごん

釈の中に「諸教の中において」とかかれて候は、華嚴・

ほうどう

ほんにや

ほけきよう

ほか

いつさいきよう

方等・般若のみならず、法華経より外の一切経なり。「こ

ひ

つた

そうろう

ほけきよう

じゅりようほん

れを秘して伝えず」とかかれて候は、法華経の寿量品よ

ほか

いつさいきよう

きようしゆしやくそんひ

と

たま

り外の一切経には、教主釈尊秘して説き給わずとなり。

えぞう

もくぞう

ほとけ

かいげんくよう

ほけきよう

てんだいしゆう

されば、画像・木像の仏の開眼供養は、法華経・天台宗に

限

かぎるべし。

うえ

いちねんさんぜん

ほうもん

もう

さんしゆ

せけん

起

その上、一念三千の法門と申すは、三種の世間よりおこ

さんしゆ

せけん

もう

いち

しゆじようせけん

に

ごおん

れり。三種の世間と申すは、一には衆生世間、二には五陰

せけん

さん

こくどせけん

さき

ふた

お

世間、三には国土世間なり。前の二つはしばらくこれを置く。

だいさん

こくどせけん

もう

そうもくせけん

そうもくせけん

もう

第三の国土世間と申すは、草木世間なり。草木世間と申す

ごしき 絵 具 そうもく えぞう お もく もう

は、五色のえのぐは草木なり。画像これより起こる。木と申

もくぞう しゅつたい え もく こんぱく もう たましい

すは、木像これより出来す、この画・木に魂魄と申す神

い ほけきよう ちから てんだいだいし 覚

を入ることは、法華經の力なり、天台大師のさとりなり。

しゅじよう もう そくしんじようぶつ え もく

この法門は、衆生にて申せば即身成仏といわれ、画・木に

もう そうもくじようぶつ もう しかん みようじよう

て申せば草木成仏と申すなり。「止観の明 静なることは、

ぜんだい 聞 書 そうろう むじようぶつしよう みみ

前代に「いまだきかず」とかかれて候と、「無情仏性は耳を

まど こころ おどろ とう そうろう

惑わし心を驚かす」等とのべられて候は、これなり。

ぜんだい うえ こうだい

この法門は、前代になき上、後代にもまたあるべからず。

しゅつたい ほうもん ちゆうとう

たとい出来せば、この法門を偷盜せるなるべし。

てんだい いごにひやくよねん のち ぜんむい こんごうち ふくう

しかるに、天台以後二百余年の後、善無畏・金剛智・不空

とう だいにちきよう しんごんしゅう もう しゅう 構 ぶつせつ だいにちきよう

等、大日経に真言宗と申す宗をかまえて、仏説の大日経

とう 無 ほけきよう てんだい しゃく ぬす い しんごんしゅう

等にはなかりしを、法華経・天台の釈を盗み入れて真言宗

かんじん こと てんじく 寄 かんど にほん まつがく

の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末学を

おうわく みなひと し いちどう しんぷく いま

誑惑せしかば、皆人このことを知らず、一同に信伏して今に

ごひやくよねん しんごんしゅういぜん もくえ ぞう

五百余年なり。しかるあいだ、真言宗已前の木画の像は

れいげんしゅしよう しんごん いご じとう りしよう 薄 ことおお ゆえ

靈驗殊勝なり。真言已後の寺塔は利生うすし。事多き故に

くわ しる

委しく注さず。

ほとけ しょうじん ほとけ そうら うでんだいおう

この仏こそ生身の仏にておわしまし候え。優填大王

もくぞう　ようけんおう　もくぞう

いちぶん

違

ぼんたい

の木像と影堅王の木像と、一分もたがうべからず。

梵帝・

にちがつ

してんとう

ひつじよう

かげ

み

したが

きへん

日月・四天等、必定して影の身に随うがごとく、貴辺を

守

たも

いち

ばまぼらせ給うべし〈これ一〉。

ごにつき

い

まいとししがつようか

しちがつじゅうごにち

くじゆん

御日記に云わく、毎年四月八日より七月十五日まで九旬

あいだ

だいにつてんし

つか

たも

が間、大日天子に仕えさせ給うこと。

だいにつてんし

もう

きゆうでん

しつぽう

おお

大日天子と申すは、宮殿、七宝なり。その大きさは

はつぴやくじゆうろくり

ごじゆういちゆじゆん

なか

だいにつてんしこ

たも

八百十六里、五十一由旬なり。その中に大日天子居し給う。

しよう

むしよう

もう

ふたり

きさき

そう

しちよう

くよう

列

勝・無勝と申して二人の後あり。左右には七曜・九曜つら

さき

まりしてんによ

しつぽう

くるま

はつびき

しゆんめ

なり、前には摩利支天女まします。七宝の車を八匹の駿馬

してんげ いちにちいちや

ししゅう しゅじょう げんもく

にかけて四天下を一日一夜にめぐり、四州の衆生の眼目と

な たも た ぶつぼさつ てんしとう りしろう

成り給う。他の仏菩薩・天子等は利生のいみじくまします

みみ 聞 ぐげん

み

うたが

こと、耳にこれをきくとも、愚眼にいまだ見えず。これは疑

がんぜん りしろう きようしゅしやくそん

うべきにあらず、眼前の利生なり。教主釈尊にまします

灼 そうろう

ずば、いかでか、かくのごとくあらたなること 候べき。

いちじよう みようきよう ちから がんぜん きい

一乗の妙経の力にあらずんば、いかでか眼前の奇異を

げん ふしぎ おも そうろう

ば現すべき。不思議に思い 候。

てん ごおん ほう 求 そうろう

いかでかこの天の御恩をば報すべきともとめ 候に、

ぶつぼういぜん ひとびと こころ ひと みな らいはい 進

仏法以前の人々も、心ある人は皆あるいは礼拝をまいらせ、

くよう もう

みな 験

ぎやく

ひと

あるいは供養を申し、皆しるしあり。また逆をなす人は、

みな 罰

いま

ないてん

勘

そうろう

皆ばつあり。今、内典をもつてかんがえて候に、

こんこうみようきよう

い

につてんし

がつてんし

きよう

き

金光明経に云わく「日天子および月天子、この経を聞く

ゆえ

しょうきじゅうじつ

とううんぬん

さいししょうおうきよう

い

が故に、精気充実す」等云々。最勝王経に云わく「この

きようおう

ちから よ

る き

してんげ

めぐ

とううんぬん

まさ

し

経王の力に由つて、流暉、四天下を遶る」等云々。当に知

にちがつてん

してんげ

たも

ぶつぽう

ちから

るべし、日月天の四天下をめぐり給うは、仏法の力なり。

か

こんこうみようきよう

さいししょうおうきよう

ほけきよう

ほうべん

しょうれつ

彼の金光明経・最勝王経は法華経の方便なり。勝劣

ろん

にゆう

だいがこ

こがね

ほうしゆ

れつ

きよう

を論ずれば、乳と醍醐と、金と宝珠とのごとし。劣なる経

め

してんげ

たも

を食しましまして、なお四天下をめぐり給う。いかにいわ

んや、法華經の醍醐の甘味を嘗めさせ給わんをや。故に、ほけきよう だいご かんみ な たま ゆえ

ほけきよう じよほん ふこうてんし 列 ほっしほん

法華經の序品には普香天子とつらなりまします。法師品に

あのくたらさんみやくさんぼだい き たも かじによらい

は阿耨多羅三藐三菩提と記せられさせ給う。火持如来これ

なり。

うえ じふ 相 伝 にだい わ み

その上、慈父よりあいつたわりて二代、我が身となりて

年 久 捨 そうろう

としひさし。いかでかすてさせたまい候べき。その上、うえ

にちれん てん たの にほんこく 立 合

日蓮もまた、この天を待みたてまつり、日本国にたてあい

すうねん すで にちれん 勝 ここち りしよう 灼

て数年なり。既に日蓮かちぬべき心地す。利生のあらたな

ほか 求

ること、外にもとむべきにあらず。

ほか　ごにつき　尊　もう
これより外に御日記とうとさ申すばかりなけれども、

しじよう　つ　がた
紙上に尽くし難し。

にちれん　こころ　尊　そうろう　ふ　ごこうよう
なによりも日蓮が心にたつときこと候。父母御孝養の

たびたび　おんふみ　そうろううえ　きよう　おんふみ　涙
こと、度々の御文に候上に、今日の御文、なんださらに

止　わ　ふ　ぼ　じごく　歎
とどまらず。「我が父母、地獄にやおわすらん」となげかせ

たも　哀
給うことのあわれさよ。

ほとけ　でし　おんなか　もっけんそんじゃ　もう　ちち
仏の弟子の御中に、目犍尊者と申しけるは、父をば

吉　占　し　し　もう　はは　しょうだいによ　もう　がきどう
きつせん師子と申し、母をば青提女と申しけるが、餓鬼道

墮　たま　ぼんぷ　とき　知　たま
におちさせ給いけるを凡夫にておわしける時はしらせ給わ

ざりければ、歎 無なげきもなかりけるほどに、ほとけ仏の御弟子とな

らせ給いて後、たま のち あらかん てんげん ご 覧阿羅漢となりて天眼をもつて御らんありけ

れば、がきどう餓鬼道におわしけり。ごこれを御らんありて飲食をまい

らせしかば、ほのお炎となりていよいよ苦をましさせまいらせ給

いしかば、急 走 帰いそぎはしりかえり、ほとけ よし もう たま仏にこの由を申させ給い

しぞかし。とき みこころ 思 遣 たまその時の御心をおもいやらせ給え。

いま きへん ぼんぷ今、にくげん ご 覧貴辺は凡夫なり。たも 此 こうよう いちぶん肉眼なれば御らんなけれども、「も

しもさもあらば」歎となげかせ給う。たも 此 こうよう いちぶんこは孝養の一分なり。

ぼんてん たいしやく にちがつ してん さだ 哀 思梵天・帝釈・日月・四天も、定めてあわれとおぼさんか。

けごんぎよう

い

おん

し

もの

おお

おうし

あ

とううんぬん

華嚴經に云わく「恩を知らざる者は多く横死に遭う」等云々。

かんぶつそうかいきよう

い

あび

いん

とううんぬん

いますで

觀仏相海經に云わく「これ阿鼻の因なり」等云々。今既に

こうよう

こころざし

篇

さだ

てん

のうじゆ

に

孝養の 志 あつし。定めて天も納受あらんかへこれ二。

ごしようそく

なか

もう

たも

詳

こと

こころ

御消息の中に申しあわさせ給うこと、くわしく事の心を

あん

案ずるに、あるべからぬことなり。

にちれん

にほんこく

ひと

怨

相模

殿

日蓮をば日本国の人あだむ。これはひとえにさがみどの

たも

そうろう

故

おんまつりごと

のあだませ給うにて候。ゆえなき御政なれども、いま

こと

遭

とき

こと

し

だこの事にあわざりし時よりかかる事あるべしと知りしか

いま

こと

ひと

まじろ

ば、今さらいかなる事ありとも人をあだむ心あるべからず

思

そうら

こころ

祈

そうろう

とおもい候えば、この心のいのりとなりて候やらん、

難

脱

そうろう

こと

そこばくのなんをのがれて候。いまは事なきようになり

そうろう

にちれん

佐

渡くに

餓

死

て候。日蓮がさどの国にてもかつえしなず、またこれま

さんちゆう

ほけきよう

読

そうろう

誰

助

で山中にして法華経をよみまいらせ候は、たれかたすけ

殿

おん

との

おん

何

ん。ひとえにとのの御たすけなり。また殿の御たすけはなに

故

尋

にゆうどうどの

おんゆえ

露

知

ゆえぞとたずぬれば、入道殿の御故ぞかし。あらわにはし

さだ

おん

祈

ろしめさねども、定めて御いのりともなるらん。こうある

おん

ふぼ

ならば、かえりてまた、とのの御いのりとなるべし。父母の

こうよう

か

ひと

ごおん

ひと

みうち

孝養も、また彼の人の御恩ぞかし。かかる人の御内をいか

なる事有ればとてすてさせ給うべきや。かれより度々すて

ことあ

捨

たも

彼

たびたび

られんずらんは、いかがすべき、またいかなる命になる事

いのち

こと

なりとも、すてまいらせ給うべからず。

たも

かみ

引

きようもん

ふちおん

もの

おうしあ

み

上にひきぬる経文に「不知恩の者は横死有り」と見えぬ。

こうよう

もの

おうし

う

もう

とり

じき

孝養の者はまた横死あるべからず。鶉と申す鳥の食する

くろがね

溶

はら

なか

こ

いし

じき

うお

鉄はとくれども、腹の中の子はとけず。石を食する魚あ

はら

なか

こ

死

せんだん

き

ひ

や

じょうご

り。また腹の中の子はしなず。梅檀の木は火に焼けず。浄居

ひ

みず

き

ほとけ

おんみ

さんじゅうににん

りきしひ

付

の火は水に消えず。仏の御身をば三十二人の力士火をつけ

焼

ほとけ

おんみ

出

ひ

さんがい

りゅうじんあめ

しかどもやけず。仏の御身よりいでし火は、三界の竜神雨

をふらして消ししかどもきえず。殿は日蓮が功德をたすけ

ひと

あくにん

破

難

こと

たる人なり。悪人にやぶらるることかたし。もしやの事あ

せんじよう

ほけきよう

ぎようじや

怨

こんじよう

らば、先生に法華經の行者をあだみたりけるが今生に

報

やま

なか

うみ

うえ

むくうなるべし。このことは、いかなる山の中、海の上に

逃

ふきようぼさつ

じようもく

せ

もつけんそんじや

てものがれがたし。不輕菩薩の杖木の責めも、目犍尊者の

ちくじよう

ころ

なげ

たも

竹杖に殺されしも、これなり。なにしにか歎かせ給うべき。

おうなん

しの

み

そうろう

ふみ

ただし、横難をば忍ぶにはしかじと見えて候。この文

ごらん

のち

決

ひやくにち

あいだ

御覽ありて後は、けっして、百日が間、おぼろけならで

同

隸

たにん

わ

いえ

よなか

おん

酒

盛

はどうれいならびに他人と我が宅ならで夜中の御さかもり

あるべからず。主しゆのめさん時は、ひるならばいそぎまいら

たも

よる

さんど

とんびよう

よしもう

たま

せ給うべし。夜ならば、三度までは頓病の由申させ給いて、

さんど

過

げにん

たにん

語

辻

見

三度にすぎば、下人また他人をかたらいて、つじをみせな

ごしゆつし

んどして御出仕あるべし。

慎

たま

蒙古びと

寄

そうら

こうつつませ給わんほどに、むこ人もよせなんどし候わ

ひと

こころ

前

引

替

そうろう

敵

う

こころ

ば、人の心またさきにひきかえ候べし。かたきを打つ心

止

もう

たも

おん

過

そう

とどまるべし。申させ給うことは御あやまちありとも、左右

みうち

い

たも

なく御内を出でさせ給うべからず。ましてなからんには、

ひともう

苦

なにとも人申せ、くるしからず。

思

にゆうどう

先々

おもいのままに入道にもなりておわせば、さきざきなら

苦

み

こころ

合

数多

ばくるしからず、また身にも心にもあわぬことあまた

しゅつたい

あくえんたびたびきた

おんな

出来せば、なかなか悪縁度々来るべし。このごろは、女は

あま

ひと

謀

おとこ

にゆうどう

だいあく

造

尼になりて人をはかり、男は入道になりて大悪をつくる

なり。ゆめゆめ、あるべからぬことなり。身に病なくとも、

灸

いち

にかしよ焼

やまい

よし

騒

やいとを一・二箇所やいて、病の由あるべし。さわぐこと

ひと

み

負

たま

ありとも、しばらく人をもつて見せおおせさせ給え。

ハハハハ

書

尽

ゆえ

ほうもん

書

事々くわしくはかきつくしがたし。この故に法門もかき

そちら

おんきよう

涼

そちら

書

候わず。御経のことは、すずしくなり候いて、かいてま

そうら

きようきようきんげん

いらせ候わん。恐々謹言。

けんじにねんひのえねしちがつじゆうごにち

建治二年丙子七月十五日

しじようきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押